私の知らない佐田岬物語

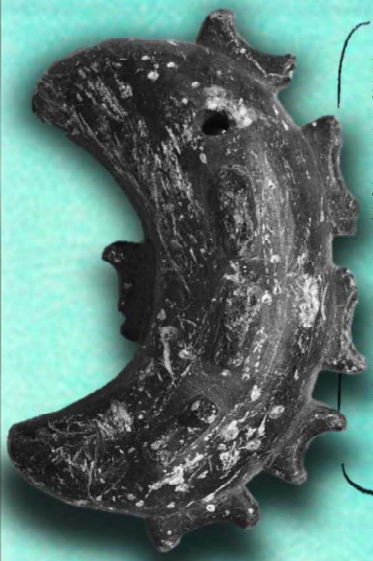
佐田岬半島は、四国の最西端に位置する細長い半島です。

約6000年前、この地に縄文人が住んでいました。

彼らの生きた証が、時を経て、私たちに語りかけてきます。

須恵器（伊方町指定有形文化財）

古墳時代（七世紀中葉）のもの。頸部下方に二本の線を配し、胴部分は櫛状模様で飾られている。上胴部には薄く緑色の自然釉が残っている。



子持勾玉（伊方町指定有形文化財）

頭部に紐孔が開けられ、片側の下には途中で中止した円孔跡が残っている。子勾玉が十二個ついており、その数にも何か意味があると考えられる。愛媛県南予地域では、唯一の出土。

佐田岬半島は、四国から九州に向かって、約四十キロメートル突出した細長い半島です。半島の南北には瀬戸内海と宇和海があり、半島先端の佐田岬と大分県佐賀関半島までは、豊予海峡を隔ててわずか十三キロメートルの距離です。

佐田岬半島を含む愛媛県の西の沿岸部地方では初となる、縄文早期の土器片は、半島先端部に位置する「みのこし遺跡」で発見されました。その後の弥生、古墳時代に渡って、半島十一か所の古墳や遺跡、貝塚から約二千点もの遺物が出土しています。

半島唯一の貝塚である「野坂貝塚」では、鉢や碗形土器、県内では二つしか出土していない十字形石器や、石鏃、石包丁などの多様な石器類、貝殻、獣骨、魚骨、人骨、土師器片など多くの遺物が見つかっています。他の遺跡からは、佐賀県や大分県の石材を使用した石器や、大分県から持ち込んだと推察される土器が見つかっており、九州との文化的交流が縄文時代にも、海上交通からあったと思われます。古墳時代にも、四国と九州との中継基地とされる子持勾玉に関係する祭祀に用いられたとされる子持勾玉が発見されており、重要な役割を果たしていたと考えられます。

この地は、重要な役割を果たしていたと考えられます。現在も、遺跡付近にある三崎港は、九州と四国を結ぶフェリーが行き交う海の玄関口です。古代から担ってきたこの役割は、これからも続いていくことでしょう。

参考文献：長井数秋『伊予国佐田岬半島の先史文化』（伊予考古学会一九九一）

写真の各遺物は町見郷土館蔵